

I 衝撃のニュースが世界を駆け巡った。北朝鮮のナンバー2、金正恩第一書記の後見人と目されていた張成沢前国防委員会副委員長の解任、そして特別軍事裁判で国家転覆陰謀行為の判決を受け、直ちに処刑された。他にも波及するものと思われる。恐怖政治そのものである。祖父以上の非情・冷酷さだ。ソ連の権力闘争でも、ここまでは非情・冷酷ではなかったろう。



張成沢の粛清は、金正恩の権力基盤を一見すると強化するとも思えるが、北朝鮮の崩壊への極めて明快な第一歩であると思える。金正恩のある意味では焦りかも知れぬ。改革開放は遠のき、挑発・瀬戸際政策がより強まるだろうし、それは取り

りも直さず崩壊への道だ。中国との関係も停滞するだろう。中国は不快感を覚えているのだろう。何れ、伝家の宝刀を抜いて傀儡政権樹立に動き出すかもしれない。その際には、温存している「金正男」というカードを切るのかも知れぬ。

日本としては、北朝鮮の挑発、崩壊に備えた対策を講じる必要がある。

ミサイル発射や原発等へのテロもあり得るだろうし、大量の難民が押し寄せるかもしれない、米軍の朝鮮半島危機への介入に伴う国内治安状況の急変もあり得るかも知れない。何れにしろ、不測の事態が起きる可能性を排除出来ないのであれば、それに備えるべきだ。新設された日本版NSCにとって、尖閣上空に設定された中国の防空識別圏問題と同じく、北朝鮮対処戦略策定は、初の試練になるだろう。

II 阿羅健一氏の「秘録日本国防軍クーデター計画」(講談社刊,450p)を一気に読んだ。自衛隊が歪な形に為らざるを得なかった原因が、吉田茂首相の陸軍嫌い故にあるべき再建国防軍への服部卓四郎(西浦進、堀場一雄と共に、陸士34期の3羽鳥と称された)達の献策を排除し、警察予備隊・保安隊の組織構成においても枢要な職務に内務官僚を多数登用して、所謂旧軍出身者を掣肘しようとしたことにあるようだ。



服部は、当時から、陸海軍の統合の重要性をも理解していたし、戦史研究の重要性も認識しており、その卓見には感服するしかない。余りにも頭脳明敏、統率力もあれば人望もあるが故に恐れられたのだろう。残念であるが、彼が登用され或は彼の献策が容れられたならば、自衛隊も真面目な組織になっていたのだろうと惜しまれる。

確かに現役時代の服部の作戦面での行為には、納得できない面が多々あるが、少なくとも戦後、日本国防軍の再建にかけた情熱と現代でも十分に納得し得るような見識には、驚嘆せざるを得ない。また、戦史研究特に敗戦国としての研究の重要性を内局官僚等の避難・批判も関わらずに成し遂

げた不屈の闘志は特筆に値しよう。

戦史研究に必要な戦争指導や作戦等に関する資料収集にも相当に苦勞したようだし、米軍に接收されぬように随分気も使ったようだ。彼等の努力があったればこそ、貴重な資料が散逸しなかった。考えてみれば、戦争に負けた直後から貴重な資料等が相当数焼却等されている。重要な国家的資料を焼却したり破棄したりすることは、現に戒めなければならない。そのような文化を日本も持つべきだろう。歴史の批判に耐える覚悟無き者は、国家的事業に与るべきではない。